



Title	外国人留学生問題研究会 (JAFSA) 海外研修プログラム参加報告：大学の国際化と留学生交流担当者の専門性
Author(s)	松本, 久美子
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.7, p.155-172; 1999
Issue Date	1999-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5565
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T19:36:37Z

外国人留学生問題研究会 (JAFSA)

海外研修プログラム参加報告

—大学の国際化と留学生交流担当者の専門性—

松本 久美子

はじめに

留学生受け入れは、大学の国際化・地域の国際化に大きく寄与するものである。また、大学がこれを推進し、国際教育交流・留学生交流を活発化し、継続していくには、海外の教育機関との人的ネットワークの構築が不可欠である一方で、学内や地域との連携を進め、留学生と日本人学生及び地域の人たちとの日常的な交流による相互理解・相互学習を進めていく必要がある。

筆者は10数年日本語教育に携わってきたが、長崎大学留学生センター赴任と同時に日本語教育部門と指導相談部門を兼任することとなった。¹⁾日本語教育に関しては、一つの学問分野として現在かなりその専門性が確立されてきている。しかし、指導相談部門に関しては、高い専門性が必要とされるにも関わらず、それを担当する教職員（留学生アドバイザー、留学生課職員等）の養成が十分であるとは言い難い状況にある。

1983年に「留学生10万人受け入れ計画」が発表されてから現在まで、奨学金制度や宿舍の整備といったハード面は改善が進められてきているが、ソフト面、つまり留学生と直接関る教職員の専門性の確立が立ち遅れている。特に国立大学における指導相談部門の職務内容は多岐にわたっており、その任に当たるものとして、継続的な研修の必要性を強く感じてきた。

国際教育交流に携わるものの専門性を高めるための研修制度を持ち、定期的に研修の機会を提供している機関として、「外国人留学生問題研究会 (JAFSA: Japan Association for Foreign Student Affairs)」²⁾ (以下JAFSA) がある。JAFSAは設立以来、外国人留学生受け入れ促進、条件整備に多くの成果を上げており、また日本人学生の海外留学に関する諸問題についても積極的に取り組み、国際教育交流を推進し、サポートするための活動を展開している。

筆者は昨年度、国際研究奨学財団からの奨励金を受け、JAFSA 研修生の一人として国際教育交流関係者が集まる 2 つの国際会議に参加する機会を得た。本稿では、筆者が参加したアメリカのワシントン D.C. で開催された NAFSA (Association of International Educators) 年次総会 (5 月) とスウェーデンのストックホルムで開催された EAIE (European Association for International Education) 年次総会 (11 月) の報告を行う。

1. 第50回 NAFSA 年次総会研修奨励プログラム

1-1 NAFSA 及び NAFSA 年次総会概要

NAFSA³⁾ は米国と諸外国との教育国際交流の推進を目的として 1948 年に創立された組織である。現在、本部はワシントン D.C. に置かれ、会員は米国をはじめ 71 カ国の教育機関、個人等で、会員数は約 7500 人に上る。米国各地区・セクションごとでの国際交流及び留学生問題に関する情報交換、研究、各種研修プログラムの実施のほか、ニューズレターの発行、専門書の出版、インターネットによる情報提供など広範な活動を行っている。毎年開催される年次総会には 4000 名近い全米及び各国の国際交流関係者が参加する。毎年総会テーマ⁴⁾ が決められ、そのテーマに沿ったワークショップ (約 30)⁵⁾ ・セッション (約 200) のほか、ブース展示会場において世界各国の高等教育機関・出版社の公報活動が行われるため、効率的な資料収集が可能である。99 年はデンバーで開催される予定である。

1998 年度の NAFSA 年次総会は NAFSA 創立 50 周年ということで、総会テーマ "Building Global Leadership" のもとに、全米をはじめ、世界各地から約 5000 人が参加するという大規模な国際会議であった。JAFSA 研修生は 30 名。参加者は JAFSA 会員であり、日本の国公私立大学および国際交流機関において事務職もしくは教育研究職にあって、国際交流に携わっている。日本人学生の送りだし、留学生の受け入れ、教育、指導相談等、様々な立場からの参加である。筆者の場合、留学生センターで、留学生に対する日本語教育と指導相談を兼任している。そのため、事前のワークショップ登録も、どのセクションのワークショップに参加するか熟考を要した。

NAFSA の最大の強みでもあり、特徴でもあると考えられるのは、国際教育交流に携わるあらゆる分野の関係者が会員となっている点であろう。つまり、NAFSA 年次総会に参加することで、その気になれば、ひとつの問題について、

異なった立場・様々な視点からのアプローチの仕方、解決の方法等を知ることができるのである。

NAFSA年次総会では、以下の5つのセクションがそれぞれにワークショップを企画し、各セクションに関するトピックで様々なセッションが行なわれており、参加者はその必要性・興味に応じて、自由に選ぶことができるようになっている。また15のSIG (Special Interest Group)⁶⁾を持つ。

- (1) ADSEC (Admissions Section)
- (2) ATESL (Administrators and Teachers in English as a Second Language)
- (3) CAFSS (Council for Advisers to Foreign Students and Scholars)
- (4) COMSEC (Community Section)
- (5) SECUSSA (Section on U.S. Students Abroad)

もちろん、いずれかのセクションに所属して、そのセクションを中心に参加・活動を進めていくこともできる。筆者の場合、今回はCOMSEC (Community Section) に所属し、COMSEC主催のワークショップを初めとして、コミュニティ関係のセッションを中心に参加した。

1-2 NAFSA年次総会参加理由及び目的

7年ほど前、主に米国からの留学生を対象としたプログラムで日本語を教えていた。アメリカの大学の協定校からの学部交換留学生がほとんどであったが、その学習態度、コース及び教師に対する要求内容等から、学生が本国アメリカの大学で、どんな教育を受けているのか知りたいと思い、何度か米国を訪れ、協定校を訪問し、クラス見学、スタッフとの意見交換等を行った。そうした訪問の時、また、日本語の夏期集中コース(バーモント)に教師として参加したときも、米国の大学の留学生の指導・援助体制が整っていることに驚かされた。その後しばらく米国の教育事情から遠ざかっていたが、長崎大学赴任以来、留学生の受け入れ及び指導相談に、より深く関わるようになり、留学生受け入れ先進国である米国での現状把握の必要性を強く感じるようになった。NAFSA年次総会に参加することによって、米国をはじめ諸外国における最近の教育・国際交流の現状について知見を得、よりグローバルな視点から仕事をしていく糧としたいというのが参加理由であった。

参加目的としては、大きく次の2点が挙げられる。

- (1) 諸外国の留学生受け入れにおける理念が、教育プログラムを含めた指導体制と学内・地域の国際交流支援団体とのネットワーク構築による援助体制に、どのように具現化されているか、なるべく多く具体的な情報を得ること。よりグローバルな視点からネットワーク作りに取り組み、現実の問題解決が図れるように、できるだけ様々な立場、異なった視点からの意見を聞くこと。
- (2) 現地の大学の教育関係者、教育交流担当者、地域の国際交流団体(ボランティアグループ)と意見交換し、情報を収集すると共に、帰国後もE-mail等での情報交換、交流がスムーズに行えるような関係を作ること。

上記2点の目的を達成するために、以下のようなスケジュールでNAFSA年次総会に参加した。

1-3 研修日程：5月23日(土) - 5月30日(土)

5月23日(土)

21:00 ワシントン・ダラス空港着 → 23:00 ホテル着

NAFSA年次総会会場である Marriott Wardman Park Hotel で、5:30p.m.から Post Arrival Orientation が行なわれていたが、飛行機の到着時刻の関係で参加できなかった。

5月24日(日)

09:30 Registration

10:00-17:30 Workshop#6 : (first part) Foundations of International
Education: Community Programming

5月25日(月)

08:00-12:00 Workshop#6 : (second part) Foundations of

International Education: Community Programming

13:00-15:30 Workshop#23 : The African-American Presence in Washington

5月26日(火)

- 09:30-11:30 First-Timers Session
13:00-14:00 COMSEC (Community Section) General Meeting
14:15-16:00 資料収集及び情報交換 (Exhibit Hall)
16:15-18:00 Opening Ceremony and Keynote Plenary: The Honorable
Franklin Sonn, Ambassador to the United States from South Africa
21:00-23:00 50th Anniversary Birthday Ball

5月27日(水)

- 07:30-08:15 COMSEC Meeting
08:30-09:45 Integrating Host Country Students with International
Students Through Programs
10:30-11:00 No More Pencils! Switching TOEFL to Computers in 1998
11:00-11:45 COMSEC Open Forum: Concerns in Community
Programming for International Students
13:15-14:30 Poster Session: COMSEC - A Showcase of Successful
Community Programs
15:15-16:00 Two Are Better Than One: Co-Training for Cross-Cultural
Programs
18:00-19:00 Japan Special Interest Group Meeting (JapanSIG) -
Japanese Short-term IEA Presentation
19:30-20:30 Japan SIG Reception, Sponsored by NAFSA and JAFSA

5月28日(木)

- 07:30-08:15 Breakfast Meeting
10:30-11:45 Reinventing Icebreakers: Facilitating More Authentic
Connections
18:00-20:00 AIEJ Reception

5月29日(金)

- 07:30-08:15 Breakfast Meeting
08:30-09:45 Recruiting and Retaining American Volunteers for

International Student Activities

10:30-11:45 Service-Learning Project for International Students: A
Model Project

17:15-18:30 Closing Celebration

5月30日(土)

05:50 ホテル発→ワシントン・ダラス空港から関空へ

5月31日(日)

帰国

1-4 研修で得たことと今後の展望

1週間という短期間の研修ではあったが、NAFSAの全体像つまり国際教育交流に関する全体像、その広がりをつかむことができた。またそれぞれの専門性の確立とネットワークの重要性を再認識させられた。ワークショップはよくオーガナイズされており、現場に応用可能なアイデアや資料を得ることができた。筆者が所属したCOMSECのワークショップの進行は、だいたい以下の手順で行われた。

レクチャー → 問題提起 → グループ・全体討論 → 解決策案・新規活動提案 → 情報交換 → グループワーク → 全体報告・討論

この中で、新しいアイデアを実際に実行に移し、現実化していくための具体的な方法・手段について、同じ興味・目的を持つもの同士がグループで討議する機会を得ることができた。参加者はそれぞれ現場に戻った後で実行可能な解決策や新しい活動を始めるための方策と、中にはその具体的な手順までも携えて帰路につく者もいた。また、情報交換の時間がプログラムの中に組み込んであったので、休憩時間だけでなくその時間を活用して、ゆっくり意見交換をすることができ、それぞれの現場に戻った後も連絡を取り合い、協力していける関係を築くことができた。

またCOMSECを構成しているメンバーは、それぞれのコミュニティのボラ

ンティア団体、国際交流関係機関のメンバーにとどまらない。大学で指導相談に携わっている者、英語教育に携わっている者等、立場を異にする者たちも参加している。こうした参加者は、本来ならATESL やCAFSS を自分の所属セクションとして選ぶであろうと考えられるが、現在特に大学内外のコミュニティとの連携・協力に自分の活動の焦点を置いているという理由で、COMSECを選んだようである。筆者自身もその一人であった。

COMSEC選択の第一の理由は、地域のボランティア団体および国際交流関係機関との連携なしに、大学の国際化、留学生支援はありえないという考えからだ。日本の大学においては、「地域に開かれた国際的な大学」が目標の一つに掲げられていると思うが、実際にはまだまだ地域に対する閉鎖性が高い。アメリカにおける活動状況を知ることで、地域との連携活動を推進していくうえで、民間の国際交流関係機関やボランティアグループが、大学に対してどのような期待・要求を持っているのか、または何を問題と考えているのかを知りたかったのである。

筆者が見たかぎりにおいて、アメリカの地域の国際交流機関やボランティアグループでは、大学と地域とのパートナーシップをどうやって形成し、その協力関係を促進していくことができるかということが中心課題の一つになっている。COMSECのボランティアグループの中には、大学の建物の一室を与えられ、活動のための専用のコンピュータを持ち、大学と共同して留学生とその家族のサポート体制強化に取り組むと同時に、地域の人達との交流を進めているところもある。キャンパスに自由に出入りし、駐車する場所を得られるかどうか大きなポイントであるという話を聞き、さすが車社会のアメリカだと思ったが、キャンパス内に臨時ではなく、駐車を許可されるということは、その存在を大学がはっきり受け入れたことを意味する。また、大学側にとってもボランティアグループにとっても、留学生とその家族をサポートし、地域との交流を促進していくためには、定期的に活動できるボランティアの確保が不可欠である。ある大学の地域協力関係促進担当者は、その大学の留学生をサポートしている地域のグループに対して期の終わりごとに感謝状を出すことを、継続的にボランティアを確保する方法として挙げていた。ボランティアグループから大学への積極的なアプローチがあるだけでなく、大学側からもかなり積極的に地域のボランティアグループに協力を働きかけているのである。

これに対して、日本では大学側がコミュニティのボランティアグループに対

して、どれだけ門戸を開き、活動の便宜を図ろうとしているであろうか。考えさせられるものがあった。

以上、会議参加前に予想したことを遥かに上回る収穫を得た。この経験を次の3点に生かして行きたいと考える。

- (1) まず、所属機関における現状と問題点を客観的に把握したうえで、現在取り組んでいる留学生と日本人学生、各学部の教職員、学外支援機関・団体等とのネットワーク作りを推進していく際に、研修で得た経験と情報を役立てたい。
- (2) 現在日本語教育と指導相談を兼任しているが、業務内容が多岐に渡ることにより、その専門性も含めて多くの課題を抱えている。他のスタッフと自分が研修で得た情報を共有することで、現状のなかで、どのような打開策があるかを考えていきたい。
- (3) NAFSAメンバーを初めとする諸外国の国際交流関係者との協力関係を保ちながら、地域の諸機関・ボランティアグループとの連携を促進し、地域における留学生交流を活発化することで、地域に開かれた大学への一歩としたい。

2. 第10回 EAIE年次総会研修奨励プログラム

2-1 EAIE及び第10回EAIE年次総会概要

EAIE (European Association for International Education)⁷⁾は欧州における高等教育の国際化を目的とし、1989年に開催された国際会議を契機に創立された非営利団体である。現在本部はオランダのアムステルダムに置かれ、会員は66カ国の国際交流関係者で約1800名を数える。年次総会の開催、国際交流担当者を対象とする研修プログラム実施のほか、教育機関の国際交流に関する研究・調査、ニュースレターの発行、専門書の出版等により会員間の情報交換の促進に寄与している。年次総会には毎年1500名近い参加者があり、100以上のセッション・ワークショップのほか、ブース展示会場での公報活動などが行われる。EAIEの総会はヨーロッパ各国持ち回りで、1999年度はオランダのマンストリヒトで開催が予定されている。

1998年度のEAIE年次総会にはEUをはじめ、世界各地から国際教育交流関係者の参加があった。年次総会のテーマは「International education: Interactions

with the wider community」である。EAIE年次総会は11月22日(日)の午後から始まり、NAFSAと同様に、会議前にPre-conference Workshopが行われる。Pre-conference Workshopは11月20日(金)から22日(日)の正午までで、2日半の間に16のワークショップがあり、その中から各自の興味・必要に応じて選んだワークショップに参加することになる。

11月22日(日)午前9時から、Information Market がオープン。日本からは、AIEJ(Association of International Education, Japan)と11の大学が交代でブースを出していた。他国の大学との交換留学等、交流協定に興味を持つ国際教育交流関係者がブースを訪れていた。

EAIE年次総会参加後、VaxjoにあるVaxjo Universityを訪問した。Vaxjo University訪問後、Stockholmに戻り、Stockholm Universityで障害を持つ学生の担当者(National Swedish Co-ordinator for Students with Disabilities)との面談、市内の公共施設(図書館等)の見学を行った。

以下、ワシントンD.C.でのNAFSA年次総会での経験を踏まえ、北欧とアメリカを比較しながら、報告を行いたい。

2-2 EAIE年次総会参加理由及び目的

筆者は現在、地域社会への留学生の主体的な参加方法の一つとして、長崎大学付属病院で留学生による入院病棟の患者に対するボランティア活動をすすめている。スウェーデンは福祉先進国として、以前からぜひ訪問したいと考えていた。ストックホルム大学のInternational Student OfficeのホームページのInformation and counselingのコーナーには、「higher educational system in Sweden」などと並んで、「career opportunities」というセクションが設けられている。このことは留学生の地域参加の可能性の大きさを示していると考えられる。また、「studying when you are disabled」というセクションもある。ノーマライゼーションの理念が実際の社会で、また教育の場で、どのように実践・実現されているのかを、ぜひ自分の目で確認したかった。

また、EAIE年次総会に参加することで、EU統合に向かって歩みを続けているヨーロッパ諸国の教育交流の現状について知見を得、アメリカのそれと比較することにより、より客観的でグローバルな視点から仕事をしていく糧としたいというのが第10回EAIE年次総会研修奨励プログラムに参加した理由であった。

参加目的としては、大きく次の3点が挙げられる。

- (1) 福祉先進国としてノーマライゼーションの理論が実践に移されているといわれるスウェーデンで、福祉的な町づくりがどのようになされているのか、その環境の中で留学生がどのように学内外のコミュニティに参加しているのか、情報を収集すること。
- (2) EAIEのProfessional SectionであるLICOM (Languages for Intercultural Communication and Mobility), EDC (Educational Cooperation with Developing Countries), SAFSA (Study Abroad and Foreign Student Advisers)に参加し、そこで現在実践中及び計画中のプログラムに必要な情報(新しい視点からの知識と具体的方策)を得ること。
- (3) 現地の大学の教育関係者、教育交流担当者と意見交換し、情報を収集すると共に、帰国後もE-mail等での情報交換、交流がスムーズに行えるような関係を作ること。

上記3点の目的を達成するために、以下のようなスケジュールで研修を行った。

2-3 研修日程：11月20日(金) - 11月29日(日)

11月20日(金)

7:55 福岡発アムステルダム経由にて、16:20ストックホルム着

11月21日(土)

09:00 - Registration

09:00 - 17:00 Workshop#3: Orientation workshop on international education

18:00 - 21:00 Workshop#5: Videoconferencing extravaganza, offered jointly by
ENIS and DEN

11月22日(日)

09:00 - 12:00 Workshop#12: Practise Swedish

12:00 - 14:00 Lunch break

14:00 - 15:30 SAFSA Opening Session: Service learning

16:00 - 17:30 LICOM Meeting

18 : 00 – 20 : 30 Opening Plenary and Reception

1 1月23日 (月)

10 : 00 – 12 : 00 A sightseeing bus tour

13 : 00 – 15 : 00 Lunch break

資料収集及び情報交換 (Exhibit Hall)

15 : 00 – 16 : 30 SAFSA session : Cross-cultural communication training

17 : 00 – late EAIE Dance and buffet venue: Stadshuset (City Hall)

1 1月24日 (火)

09 : 30 – 11 : 00 EDC session : Towards a new paradigm of development
cooperation in higher education

11 : 00 – 15 : 00 Lunch break

資料収集及び情報交換

15 : 00 – 16 : 30 General session : Internationalisation at home!

16 : 30 – 18 : 00 Closing Event and Reception

Stockholm大学18:30発、バスでVaxjoへ。Vaxjo 24 : 30着

1 1月25日 (水)

Vaxjo University 視察およびBaxjo市立病院見学

09 : 00 – 10 : 00 General presentation of Vaxjo University, Information Office

10 : 00 – 11 : 00 Meeting with representatives from one of the seven departments
and a representative from the International Office

11 : 00 – 12 : 00 Department of Health Sciences and Social Work の講師と面談

12 : 00 – 13 : 00 Lunch at Kramer's Restaurant

13 : 00 – 13 : 40 留学生の案内で校内見学 (学生寮、Student Union、図書館等)

13 : 40 – 14 : 30 General presentation of how Baxjo University interacts within the
community

15 : 00 – 16 : 30 社会福祉学科 の講師の案内でBaxjo市立病院見学

17 : 00 – 17 : 40 Baxjo大学のパーソナルコンサルタントで障害を持つ学生の担
当者と面談

18 : 15 – late Dinner in the Kingdom of Crystal

11月26日 (木)

Vaxjo 07:00発、バスでStockholmへ → 14:30 Stockholm着

15:30-17:00 Stockholm大学で障害を持つ学生のコーディネーター
(National Swedish Co-ordinator for Students with Disabilities)
と面談

11月27日 (金)

Sweden Houseで資料収集 (Fact Sheets on Sweden等)

ストックホルム市立図書館見学

11月28日 (土)

5:50 a.m.ホテル発→10:40a.m.Stockholm発、アムステルダムを経て関空へ。

翌11月29日 (日) 関空着 帰国

2-4 研修内容と今後の展望

2-4-1 EAIE年次総会：ワークショップ及びセッション

EAIEは以下の8つの専門部会 (Professional section) に分かれ、3つのSIG(Special Interest Group)を持つ。

Professional sections

- (1) ACE (Admissions Officers and Credential Evaluators)
- (2) EBS (Economics and Business Studies)
- (3) EDC (Cooperation with Developing Countries)
- (4) EEPIC (European Educational Programme Coordinators)
- (5) IRM (International Relations Managers)
- (6) LICOM (Languages for Intercultural Communication and Mobility)
- (7) RILO (Research and Industrial Liaison Officers)
- (8) SAFSA (Study Abroad and Foreign Student Advisers)

Special Interest Groups

- (1) DEN (Distance Education Network)
- (2) SWING (Stage, Work Placement and Internship Networking Group)
- (3) NESS (Network of European Summer Schools)

EAIEでは一つの部会に所属することはせず、LICOM、SAFSA、EDCの3つの部会にまたがって、ワークショップおよびセッションに参加した。

NAFSAのCOMSECは主に地域の国際交流団体やボランティアグループによって組織されている。EAIEは、SAFSAの中に学外・学内のコミュニティ関係のトピックを含むにとどまり、NAFSAにおけるCOMSECのようなコミュニティ関係専門の部会を持たない。ここには、市民生活の保障を政府によらず住民自身の手でという自主独立の精神が基本にあり、NGO・NPOの活動が活発に行われているアメリカと、ここ約30年の間に政府による社会福祉政策が行き届き、アメリカでは多くボランティアに拠っている部分もすべて制度化され有給の専門職員がそれに当たっている北欧諸国との違いが現れていると考えられる。

参加したワークショップ・セッションのなかで、このコントラストが最もはっきり見られたのは、SAFSAのセッションでの、アメリカからの発表者による「Service Learning」のプレゼンテーションにおいてであった。ボランティア活動を一つの教育方法として取り入れ、しかもそれを国際教育交流のマーケットに乗せた極めてアメリカらしいやり方に対して、迎えた参加者からの反応は極めて冷ややかなものであった。北欧でも是非「Service Learning」を取り入れるべきであるという態度のアメリカの発表者に対して、スウェーデン、ノルウェーなどからの参加者からは、「自分たちの国はアメリカが抱えているような問題を持たない。」「やり方が違うだけだ。自分たちはボランティア活動に拠るのではなく、税金を支払うことによって同じことを行っている。」という意見も出された。NAFSA総会でも「Service Learning」に関するセッションに参加したのだが、「Service Learning」と筆者が長崎大学で進めている留学生によるボランティア活動との共通性を見だし、それに関するヨーロッパの現状を知りたいと思っていたので、その時の北欧側の反応に少なからず失望を覚えた。

総会后、Vaxjo Universityを訪問。社会福祉学科の教官との面談、病院見学。ストックホルムに戻って、ストックホルム大学の障害を持つ学生の担当者との面談。公共交通機関を使って市内、公共施設見学。

ノーマライゼーションの理論が具体的な制度となり、福祉・教育の分野に、また町づくりに生かされ、地域住民の意識の中に浸透している社会を実際に目の当りにして、愕然とするものがあった。これだけ日常的にいろいろな国

の学生と関わりながら、自分自身の物の考え方や見方が、思っていたよりずっとアメリカから得た情報の影響を受けていたことに気づいたことは大きな収穫であったと思う。

General session の「Internationalisation at home!」の発表メンバーは「Internationalisation at home!」を新たに専門部会 (Professional section) の一つとして申請しようとしている。この部会が成立すれば、EAIEにNAFSAのCOMSECとは違ったコミュニティ関係の部会が誕生することになる。新部会設立メンバーの名簿に名前を記入し、今後連絡を取り合うことを約束した。

LICOM (Languages for Intercultural Communication and Mobility)のミーティングでは、ソクラテス・エラスムス⁸⁾で活発化している交換留学プログラムによって、ヨーロッパの大学で英語の比重が高まり、それぞれの母語の重要度が低くなっているという危機感が感じられた。EAIE年次総会は実際には全プログラムが英語で行われており、出版物も英語で出版されているが、英語がEAIEの公式用語ではないことが確認され、会議および出版において、英語以外の言語の使用を認めるよう意見書を提出する旨の確認があった。

2-4-2 大学視察及び担当者との面談 (総会后)

長崎大学留学生センターでは、まだ短期交換留学プログラムは開始しておらず、一部の学部で行われているにすぎない。スウェーデンには協定校はないので、インターネットでコンタクト先を探し、訪問、面談の依頼等、EAIE総会参加後の予定は、すべてE-mailを通じて行った。Vaxjo 大学訪問に当たっては、大学視察とともに、「コミュニティプログラム」「ボランティアワーク」「障害を持つ学生」の3点に関して、担当者との面談のアレンジを依頼していた。Stockholm大学の障害を持つ学生の担当者 (National Swedish Co-ordinator for Students with Disabilities) との面談では、特にスウェーデンの福祉政策について、その理念と歴史的経過および現在の状況について話を聞いた。スウェーデンでは障害を持つ学生 (留学生を含む) は、その障害にかかわらず、通常の講義に一般の学生と一緒に参加する。障害を持つ学生のための特別講義というものも存在せず、障害を持つ学生は完全に通常のカリキュラムの中に「統合」されている。ノーマライゼーションの理論は絵に書いた餅ではなく、制度として、システムとして具体化されているのである。この統合というのは優勢な方に弱い立場の者が合わせる形で行われるのではない。日本では、教育においても福

社の分野においてもよく見られる、「区別・差別・分離・隔離」と反対の状況を指している。

Disability Policies in Sweden

The aim of Swedish desability policies is full participation and equality. People with functional disabilities must have the same opportunity as others for participating in community life. Responsibility for achieving this objective is borne by the whole of society, but ultimately the state, local authorities and county councils.

(Fact Sheets on Sweden, Published by the Swedish Institute April 1997)

上記のポリシーは障害を持つ人にだけではなく、スウェーデンに住む全ての市民にあてはめられる。

例えば、ストックホルム市立図書館の児童図書室にはスウェーデン語で書かれた図書に加えて、ストックホルム市に住んで図書館を利用する外国からの住民の子弟のために、その母語で書かれた図書を備えている。現在18カ国の国の言葉で書かれた本が購入されている。日本語で書かれた児童書もあった。まだ40-50冊程度であったが、日本人でこの図書館を利用する家族が2家族になったので、これからもっと増やす予定だそう。

ストックホルム大学の障害を持つ学生のコーディネーターは、スウェーデンでは最近経済状況が低迷しており、予算の関係から、ボランティアの導入を考えなければならなくなっているが、これは以前の状況への逆戻りであると話していた。これからスウェーデンの社会にボランティアがどのように導入されていくのか、今後も連絡を取り続けていくつもりである。

以上、短期間ではあったが大きな収穫を得ることができた。この経験を今後次の3点に生かして行きたいと考える。

- (1) EAIE参加と大学や公共文化福祉施設視察で、スウェーデンの社会福祉政策に関する知識と、スウェーデンの大学での学生生活全般に渡るスウェーデン人学生と留学生（障害を持つ学生も含む）との統合の状況とを知ることができた。これらを長崎大学学内および地域社会で、分離ではなく統合による真の地域共生を進めていく上で応用できればと考える。

- (2) 現在の研究テーマのひとつは日本語教育と異文化理解教育の統合である。LICOMで得た知識を担当・実践している語学プログラムの改善にいかしたい。
- (3) 上記2点を実践していくために、他のスタッフや日本人学生と自分が研修で得た情報を共有することで、問題に対する打開策を考えていきたい。

おわりに

今回、学内措置としては「海外研修」という形で、NAFSA年次総会およびEAIE年次総会参加が可能となった。ワークショップ、各セッション等では専門知識の向上とともに、各国からの参加者との討論、情報交換によって、期待した以上の成果が得られた。食事時の雑談もお互いの友好関係を深めるのに非常に有効であった。夜も参加メンバーとセッションの内容について感想を述べあったり、次の日の計画を練ったりと、朝起きてから寝る間際まで各参加者との交流・意見情報交換に終始した。また、次回の年次総会でのワークショップ、セッション内容について、具体的にどんな可能性があるかについても話し合うことができた。各国からの参加者とそれぞれの現場に戻った後も連絡を取り合い、協力していける関係が築けたことは大きな収穫であり、何よりもネットワークの重要性を再認識させられた研修であった。

奨励金受給者は会議前後に教育機関への訪問を奨励されており、特に留学生課や国際交流課の大学間交流担当者は新規協定校の開拓、現協定校訪問等、積極的に行っていた。こういった事務職員を中心とする活動が国立大学でも盛んになることが望まれる。筆者は教官職にあり、NAFSA年次総会も、EAIE年次総会も日本語コース期間中であったため、職場を離れるのは会議期間を含む1週間から10日が限界であった。参加期間中は担当の授業を他の教官に代講してもらわなければならなかった。しかし、皆過密スケジュールをこなしているにもかかわらず、毎日の宿題のチェック等も含め、代講を快く引き受けてくださった。ここに深く感謝したい。

また、国際奨学財団奨励金受給によるNAFSA年次総会参加およびEAIE年次総会参加という機会を与えてくださり、会議前・期間中を通して、様々な形でサポートしてくださったJAFSA関係者の皆さまにも深く感謝の意を表したい。

今後も機会があれば是非JAFSAの持つ様々な研修プログラムに参加し、研鑽を積んでいきたいと考えている。

注

- 1) 長崎大学留学生センターでは、専任教官は全員、日本語教育部門と指導相談部門を兼任することになっている。
- 2) JAFSAは1968年に、「外国人留学生が留学目的を達成できるよう外国人留学生の受け入れ、教育及び厚生補導等の諸問題を検討して、これらの改善に寄与する」ことを目的として設立された研究団体である。活動内容としては、夏期研究集会、文部省・日本国際教育協会共催による留学生担当者研修会、月例研究連絡会、会報の発行、出版物の作成等が挙げられる。
- 3) JAFSA事務局：108東京都港区診た-15-14慶応義塾大学国際センター内
TEL: 03-3453-4511 EXT2363 FAX: 03-3769-2057
<http://www.vcom.orjp/project/international/JAFSA/index-j.html>
NAFSA本部事務局：1875Connecticut Avenue, NW, Suite 1000
Washington, D.C.20009-5728 · USA
web:<http://www.nafsa.org>
- 4) 1997年度のテーマは、“Communities Living Together: Cultural Identity in an Changing World”であった。
- 5) 参加人数に制約があり、参加希望者は総会前に事前登録が必要である。ワークショップはレクチャーと討論やグループワークによって進められていく。職場で直面している問題の解決の糸口を見つけたり、新プログラム立ち上げに関する具体的なアイデアを得たりすることができる。1日から2日にわたって行われるので、受講者同士が緊密な関係を築きやすい。
- 6) “1997-98 NAFSA Directory”には以下のSIGが掲載されている。
 - ・ Black/Multicultural Professional in International Education Special Interest Group (B/McPIE)
 - ・ Canada SIG
 - ・ China SIG
 - ・ Committe on Students and Scholars from African Countries (COSSAC)
 - ・ Eastern & Central European and Newly Independent States SIG (ECENIS SIG)
 - ・ Francophone World SIG(FW SIG)

- ・ Global Nomad SIG (GN SIG)
- ・ Intermltural SIG (I SIG)
- ・ International Education for Persons with Disabilities SIG (IEPD)
- ・ International Living Centers SIG (ILL SIG)
- ・ Japan SIG
- ・ Lesbigay SIG
- ・ Microcomputer SIG (Micro SIG)
- ・ Middle East Interest Group (MEIG)
- ・ Student Programming and Mentoring SIG (SPAM SIG)

7) EAIE本部事務局: European Association for International Education

PO Box 11189

1001 GD Amsterdam · The Netherlands

e-mail: eaie@eaie.nl web:http://www.eaie.nl

- 8) エラスムス計画 (The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students=ERASMUS) は、1987年に発足したプログラムで、大学間の協力による共同教育プログラム (ICPs:Inter-University Co-operation Programmes) の積み重ねにより「ヨーロッパ大学間」ネットワーク (European University Network) を構築し、結EU加盟国間の学生流動を高めようとする計画である。1995年度から新計画「ソクラテス」(SOCRATES) に衣替し、加盟諸国の言語教育の振興、学生・教員の流動化の促進、外国での取得単位・履修の認定、遠隔教育の分野における協力関係の発展、教育に関する情報・経験の相互交流の強化等が、加盟国間の緊密な協力のもとで進められている。

参考文献

- ・ JAFSA外国人留学生問題研究会 渉外委員会事務局 (1998) 「1998年度第8回JAFSA 外国研修プログラムオリエンテーション資料」
- ・ JAFSA外国人留学生問題研究会 (1998) 「ヨーロッパ高等教育事情—エラスムスからソクラテスへ」 NEWSLETTER NO.90 1998—4, pp9-11
- ・ 留学交流事務研究会 (1998) 「留学交流執務ハンドブック 平成10年度」 第一法規出版
- ・ NAFSA: Assosiation of International Educators(1980) "1997-18 NAFSA Directory"
- ・ Swedish Institute(1997)"Disability policies in sweden", Fact Sheets on Sweden

(留学生センター講師)